

# 六甲自然案内人の会 平成 23 年 2 月度定例観察会報告書

実施日 : 平成 23 年 2 月 12 日 (土)  
担当班 : 2 班  
コース : 須磨海岸～須磨浦公園～鉢伏山～須磨寺  
参加人数 : 会員 30 名 ビジター 19 名 計 49 名  
テーマ : 早春の須磨浦公園探索

## 概要

海岸沿いの急斜面に見られる林で、この六甲山では須磨付近に広がっている「ウバメガシ群落」の  
植生観察と、須磨の歴史・特性等をあらゆる方面から考察してみました。

## ウバメガシ群落

海岸付近の低海拔域に分布

ウバメガシ・ヤマモモ・ソヨゴ・クロマツ  
ヒサカキ・カクレミノ・ヤブニッケイ・トベラ  
ベニシダ・ウラジロ・ツルアリドオシ

## 本日観察した植物

ヤマモモ	ムクノキ	クスノキ	クロマツ	アカマツ
ソメイヨシノ	ヤマザクラ	ドウダンツツジ	シャシャンボ	サザンカ
タラノキ	ネジキ	ヒメユズリハ	トベラ	アベマキ
コシダ	ウバメガシ	カクレミノ	ヒサカキ	ヤシャブシ
ヤブニッケイ	ヌルデ	ハリエンジュ	アオダモ	カゴノキ
リョウブ	ウラジロノキ	カラスザンショウ	ソヨゴ	ツルアリドオシ
テイカカズラ	トウネズミモチ	ネズミモチ		

## 須磨という地名の由来

地形的にこの場所は鉢伏山や鉄拐山が海に迫った平地のスミ (角)、また畿内の西南のスミに位置しており、隅 (スミ) っこである。このスミが、なまってその後、スマと呼ばれるようになった。やがて奈良時代に政府が漢字 2 字を使って標記するように命じたことから、このスマは周麻・珠馬などと呼ばれやがて須磨の字が定着していった。

## 敦盛塚前の敦盛そば店の由来

記録によれば、江戸時代から現在位置に存在した。現在のソバ屋は戦後に開店したが震災で倒壊し閉鎖されていたが、大河ドラマ「義経」の放送を契機に 2005 年 4 月に 10 年ぶりに再開された。

## ウバメガシ

須磨海岸の植生の特徴でもっとも顕著に数多い樹木がウバメガシ。ブナ科コナラ属の広葉常緑樹。カシの名前を持つがコナラ属。殻斗の様子は鱗片が瓦を重ねたように並ぶ。これはコナラ属（ナラ）の特徴。

ウバメガシの葉はこの種類の中では最小で、材は緻密で非常に硬く比重が大きく水に沈む。ウバメガシは備長炭の原料である。備長炭は良質な白炭でもっとも硬く日持ちが長く、灰が少ない。また、煙が出ずに長時間日持ちがすることで、うなぎの蒲焼や、焼き鳥などに使われる。炭に小さな空洞がありそれが臭いを取る効果を発揮するので消臭剤として活用されている。



## 源平の合戦について

### 天下分け目の合戦

内戦としては最大級の合戦

神戸の合戦と関が原

平家 10 万

源氏 範頼 5 万  
義経 3 万 実際はもっと少なかった  
たと言う説アリ

### 政治の主導者の転換点

天皇を中心とした貴族政治から武士が政治を行う  
ことになった

これ以降明治維新まで 封建政治の始まり

### 義経の進軍路

寿永三年二月四日 京都の大江山周辺から出発  
その日のうちに東条湖付近の  
三草山に布陣した平家の軍勢  
に襲い掛かり撃破 行軍 約  
70k m  
二月五日から  
六日の夜 休憩の後 藍那まで進軍 藍  
那付近で軍議の上兵を分ける

相談が辻（そだが辻として今も地名が残る）

主力は白川付近から塩屋へ進  
軍

義経は 300 騎をつれてひよど  
り越えへ

しかし平野側に平家の強力な  
武将が待ち受けることを知り  
更に西へ

地元の村人鷲尾三郎が案内  
暗闇の中の行軍老馬に白いし  
るしをつけてそれを目印に行  
軍

七日の朝 鉄かい山のふもとに到着

午前 6 時 逆落としの開始

### 敦盛と直実

敦盛は清盛の弟の息子 叔父おいの関係  
16 歳 鉄漿に薄化粧青葉の笛

直実は もとは平氏の出身 源氏系に養子に行  
き源氏軍に参加

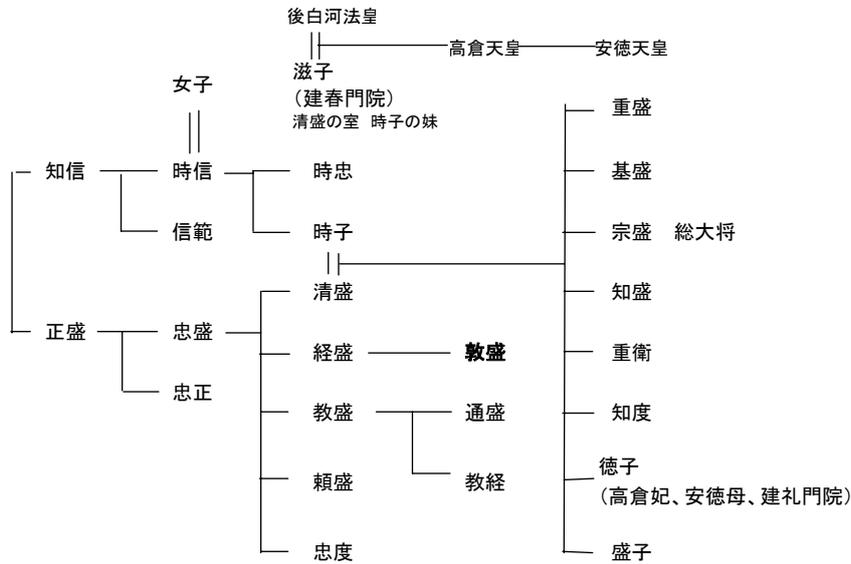


参考文献

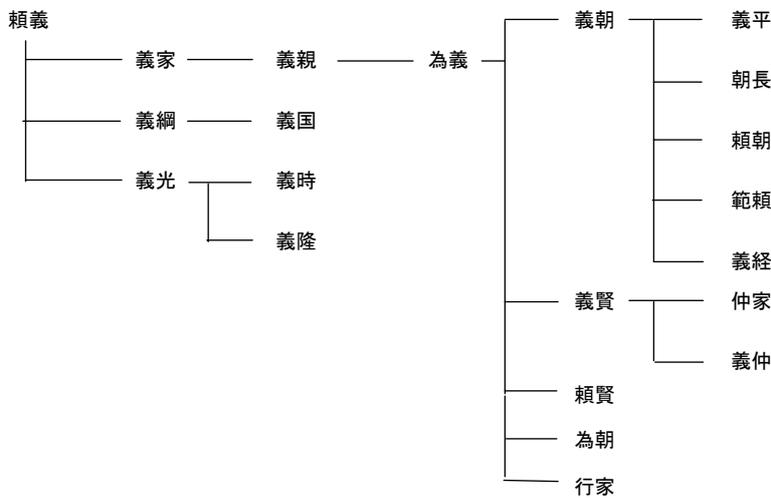
平家物語 新編日本古典文学全集 平家物語 市古貞次 小学館  
 源平と平家 神戸史談会 監修神戸市 神戸市教育委員会  
 英傑の日本史 井沢 元彦 角川文庫  
 旗振り山 柴田昭彦 ナカニシヤ出版  
 その他です

源平合戦の武将 相關図  
 平氏略図

参考文献 英傑の日本史 井沢元彦



源氏略図



## 「春の海終日（ひねもす）のたりのたりかな」

与謝 蕪村（1716～1783）の句。

1766年と1778年に讃岐を訪れている。

その際、須磨を訪れている。

したがってこの句も、1766年に讃岐への旅の途中で須磨に寄り詠んだものと思われる。

蕪村は芭蕉にたいへん憧れていた。

しかし、経済的に厳しかったので芭蕉のような旅はなかなかできなかった。

若いころは絵を描きそれを売って生計を立てていた。

兵庫津（ひょうごのつ）に北風家あり。

灘の酒を江戸に運ぶ樽廻船で莫大な富を作り上げた。この北風家は蕪村のパトロン。

1778年3月14日～3月16日北風家の誘いで蕪村が訪れている。15日には和田岬の和田神社の隣松院（当時の社務所）にて句会が開かれている。



## 「蝸牛（かたつむり）角ふりわけよ須磨明石」

松尾 芭蕉（1644～1694）の句。

須磨を詠んだ句はかなり多くあるようです。

江戸時代まではさみしい所といえば「須磨」。

畿内の西端であり、一の谷の合戦で多くの死者が出ている場所であることから。

芭蕉の句に「寂しさや須磨にかちたる浜の秋」がある。これは、福井県敦賀市の種の浜（いろがはま）で詠んだもの。これでもわかるように、当時須磨は寂しさの極みであったようだ。

この句は、須磨の名月にあこがれ、源平の古戦場を訪れたいと思っていて、1688年4月20日に須磨・明石を旅した際に、境川のほとりで詠まれた句。須磨で1泊している。（現光寺風月庵）

この紀行は「笈の小文（おいのこぶみ）」に記された。

芭蕉が訪れた最北端が秋田の象潟（さきかた）。最西端が明石。

源氏物語の「須磨」に「明石の浦はただ這い渡るほどなれば」とあるのを受け、カタツムリが角を降る前後左右に須磨・明石の景色が展開しているのを謡った。（須磨・明石の近距離を謡っている）

この翌年、すなわち1689年3月27日～「奥の細道」の旅へ。

また、1688年に大阪の堂島で米穀取引所が設立。



## 旗振山

文字通りここで旗を振っていた。

何のために？⇒米相場を伝えるため

大阪の堂島に「米穀取引所」があり、全国の米価の基準であった。

このことから、大阪の米相場をいち早く他の地域に伝達するため（その逆も）に考案された。

当初、江戸幕府は米飛脚を保護するため「旗振り通信」禁止令のお触れ書きを出した。

1865年（慶応元年）イギリス・フランス・オランダの艦隊が兵庫沖に現れた際に、旗振り通信によって速報がされたのをきっかけに禁止令が解かれた。

1893年に大阪に電話が開通すると次第に電話に取って代われ、1918年（大正7年）に完全に廃れた。しかし、電話開通後もしばらくは使われていた。当初は電話代が高いこともあったが、「旗振り通信」の方が早かった。

方法は、昼間は旗、夜は松明や提灯。

旗は晴れた日、曇りの日で大きさが違った。

晴れの日：60×105 100×150

曇りの日：90×170 120×200

旗の長さ：240～300

素材は最初は木綿その後金巾製。

望遠鏡で確認。

場所の間隔は。

2里～5里。平均は3里。

山の高さは。

毎日往復しなければならないので片道1時間以内。

通信に要した時間は。

熟練した人の場合、相場1回分を送信するのに1分程。

大阪～広島40分程度。

1981年に大阪～岡山で実験が行われた。その際は、27地点を結んだもので（167キロ）約2時間かかった。中継地点の多さや、視界の悪さもあるが、当時の職人さんの技術の高さがうかがえる。

NTTの長距離電話に利用されている「マイクロウェーブ」（極超短波）の代表的なルートと、当時の中継ルートが良く似ている。それだけ理にかなっていた。

実際の旗振りは。

盗み見されることを想定して、予め決めておいた数をあわせて通信した。

1 銭：右横斜め下

2 銭：右横

3 銭：右横上下二振り

4 銭：右横斜め上

5 銭：直立

10 銭：直立二振り



## 須磨海苔

(海上に浮き流しの方法で養殖が行われている)

- ① 昭和35年より冬期の収入を得るために海苔養殖が始まった。
- ② 80%が焼きの利用として関東に運ばれる。
- ③ 須磨で海苔の養殖が可能になったのは3つの養殖技術が開発されたことによる人工採苗、海苔網の冷蔵保存、浮き流養殖
- ④ 養殖の1年間の流れ

5～8月 果胞子が糸状体になって牡蠣殻にもぐって夏を過ごす

9～10月上旬 海苔網にタネ付けをする

10月下旬～1月下旬 網で海苔を育てる

12月中旬～4月上旬 のりが20cmになれば収穫

### ⑤有明海での養殖との違い

有明海は支柱式で潮の満ち引きによる干満差をうまく使って養殖を行っている。

海苔の色は茜黒色で柔らかい。須磨海苔は緑黒色でやや硬い。

### ⑥海苔の全国県別生産量

佐賀21億枚、兵庫16億枚で全国第2位  
70年代頃には全国1位の生産量を誇ったこともある。

### ⑦海苔刈り取り船の構造と刈り取りの状況 イラストで説明

## 須磨寺

正式な名前は福祥寺。真言宗。昭和22年独立して須磨寺派の大本山。

縁起：淳和天皇の時に和田岬の海中から漁師が聖観音像を引き上げ会下山の北峰寺に安置していたのを886年に聞鏡上人が須磨の地に移したのが始めとされている。その後、豊臣秀頼が復旧を行ったりした。もとは12坊あったのが今は3院だけが残って独立している。(蓮生院、正覚院、桜寿院)

国指定重要文化財も多く、境内には子規や芭蕉などの文学碑も数多くある。

明治24年頃寺の南に千本の桜が植えられ須磨大池とともに新吉野と言われる桜の名所となり人出で賑わった。

毎月20・21日は「大師さんの日」参道に屋台が出て参詣者があふれる。



## 後記

前日の雪が残り、時折降る寒い1日でした。そんな中、ベテラン会員のサポートを得て2班に分けて実施することが出来、充実した観察会が実施できたのではと思います。当日、お手伝いいただいた会員の皆様に感謝申し上げます。

